

深イ〜話!

No.20

《長崎に原爆が落ちた時、当時10歳だった萩野美智子ちゃんの作文から引用》

雲もなく、からりと晴れたその日であった。私たち兄弟は、家の2階で、ままごとをして遊んでいた。お母さんは畑へナスをもぎに行った。

その時、ピカリと稲妻が走った。あっという時はもう家の下敷きになって、身動き一つできなかった。「助けて、助けて」とわめいた。姉たちが、私を助け出そうとした。しかし、土壁の木舞いの組んだのが間をさえぎっていて、押しでも引いてもものけられなかった。大きい姉ちゃんが、水兵さんを4、5人連れて走ってきた。その人々の力で、私は助け出された。

向こうのほうで、小さな子の泣き声が洩れてきた。それは二つになる妹が家の下敷きになっているのであった。急いで行ってみると、妹は大きな梁に足を挟まれて、泣き狂っている。4、5人の水兵さんが、みんな力を合わせても、梁は四本つづきの大きなもので、びくともしない。挟まれている足が痛いので、妹は両手をばたつかせて泣きもがいている。水兵さんたちは、もうこれはダメだとい出した。

そのとき、向こうから矢のように走ってくる人が目についた。頭の髪の毛が乱れている。女の人だ。裸らしい。むらさきの体。大きな声を掛けて、私たちに呼びかけた。ああ、それがお母さんでした。

「お母ちゃん」私たちも大声で呼んだ。あちこちで火の手があがり始めた。

火がすぐ近くで燃え上がった。お母さんの顔が真っ青に変わった。お母さんは、ずっと目を動かして、梁の重なり方をみまわした。

やがて、わずかな隙間に身を入れ、一ヶ所を右肩にあて、下くちびるをうんとかみしめると、うううーと全身に力を込めた。パリパリと音がして、梁が浮き上がった。妹の足がはずれた。大きい姉さんが妹をすぐ引き出した。そして、妹を胸にかたく抱きしめた。

しばらくしてから、思い出したように私たちは、大声をあげて泣き始めた。お母さんはその声を聞くと、気が抜けたのか、そのままそこへ、へなへなと腰をおろしてしまった。お母さんは、なすをもいでいる時、爆弾にやられたのだ。上着ももんぺも焼き切れちぎれ飛び、ほとんど裸になっていた。髪の毛は赤く縮れていた。体中の皮は大火傷で、じゅるじゅるになっていた。さっき梁を担いで押し上げた右肩のところだけ皮がペロリと剥けて、肉が現われ、赤い血がにじみ出していた。お母さんはぐったりとなって倒れた。お母さんは苦しみ始め、悶え悶えてその晩死にました。